

翻訳・翻刻

翻刻と解題『百合野集』上

‘Yurino-shu’ Part I: A Study of Old Texts  
Rewritten in Contemporary Language and  
Bibliographical Introductions

大西 紀夫

OONISHI Norio

底本 上 南砺市立福野図書館 版本。中 滑川市立図書館 版本。

下 架蔵 版本。

書型 半紙本 縦23・0×横16・4 (糶)。

冊数 三冊(雪・月・花)。

表紙 菱万字文様(上、中)。亀甲文様(下)。

題簽 南砺市立福野図書館本欠・滑川市立図書館本欠。

月明文庫本(石川県立図書館)「俳諧 百合野集 雪」・「俳諧 遊利

能集 月」・「はいかい ゆりの集 花」。

架蔵本 第三卷「はいかい ゆりの集 花」中央、縦17・1×横3・

3 (糶)。

内題 百合野集。

柱 「花一ノ二十五終」(第三卷)。

序 希因 寛延二己巳夏。

跋 寛延四辛未のとしノ三月登州府岩代明

刊記 俳諧書林 東武 辻村五兵衛ノ京都 井筒屋庄兵衛ノ神都 藤

原長兵衛

行数 序・跋 每半葉八行。本文 每半葉九行。

伝本 上(雪) 南砺市立福野図書館 版本。中(月) 滑川市立図

書館 版本。上(雪)、中(月)、下(花) 月明文庫(石川

県立図書館) 写本。下(花) 架蔵 版本。雪・月・花合本

志田文庫(富山県立図書館) 写本。

※

百合野集(ゆりのしゅう)。寛延四年(一七五二)刊。半三冊(第

一卷「俳諧 百合野集 雪」・第二卷「俳諧 遊利能集 月」・第三

卷「はいかい ゆりの集 花」)。幾暁(春坡)編。希因序。岩代明

跋。伊勢山田の俳人幾暁の北国紀行文集。第一卷(雪)は、寛延二年

夏から始まり、近江・越前・加賀・能登までの紀行を収録。第二卷

(月)は、能登より越中に入り、高岡で冬籠りして越年。翌寛延三

年は再び金沢に赴き、師麦林(乙由)の十三回忌法会興行。高岡に

戻り、富山・滑川・魚津・生地・泊と越中各地に杖を曳く。第三卷

(花)は、宇奈月で、「愛本ノ賦」から始まり、帰路、魚津・滑川・

富山で風交を重ね、戸出で越年するまでの紀行を収録。三卷三冊、全

一〇七丁あり。第二卷、第三卷の大半が越中各地での地元俳人との交

流が中心である。江戸時代を通して、これ程越中の俳人との親密な交

流の窺われる紀行文集は他に例を見ない。

百合野集 一

序

かゝることもの折にやありけむ。何につく

ともなきこゝろ哉とは西上人の高論に

して、ゆりにうつむきひばりに

あふむく、雲水の嘆息なりと歎。

こゝを蕉翁も、はら中やものにも

つかず、と口ずさて漂泊を感じ

られしが、先師このほうしが」(一オ)

西国抖藪をおくりて、姫と

おにとに草まくらの変化をしめ

されしを、ことし越路の記行

の名とするも、よしこれうなづく

事しかり。

寛延二己巳夏 希因書

印 金城酒徒 暮柳」(一ウ)

百合野集第一卷

歌仙

姫百合の鬼もあるじや草枕

月照ながら若葉おり敷

町のおと一時づゝに静りて

流のすそは船の入る川

哥よみの合点はこちと違ふ也

屏風の破も直る手細工

よ所からの亥の子に昔思はるゝ

小春に猫の恋はないやら

嶋原は畠の臭い疵がある

六ツ半にむく瓜に講釈

丈山の老の波そふ詩仙堂

おろした柴に旅人休める

瓢箪にひよ鳥上戸ながめつゝ

暴風も吹ず天下太平

事触の鐘に晴て昼の月

草鞋も釣て橋の番所

水鳥も岸に片よる花筏

鐘の闇に柳いそがし

通円の茶を陽炎にたぎらせて

老僧ひとり順礼の中

寝はぐれた蚊帳を出たれば蚊に喰れ

闇にも匂ふ垣の忍冬

禰宜殿も布留の鳥居をあぶながら

芝居のあとに次郎のこれり

蕎麦切の鼠大根に鱈ぶし

階子にたつて上下の用

暑病が踊の化をあらはして

東山からによつと出る月

菊の詩は下手の作れど芳く

袈裟を碁盤に置いて雪隠

短夜が明て伏見の二番船

東棠

幸浦

春

麦

児

岸

村

梅関

曇舟」(二ウ)

曾

麦

春

幸

茂

岸

村

素

東」(三オ)

春

麦

梅

岸

茂

とらへるほどに水鶏近よる

春

掃除日は門前の子も遊せず

岸

わすれて置いた時計今うつ

舟

水呑に花の吉野を腰につけ

曾〔三ウ〕

声も達者に千里鶯

執筆 夜白

此一軸は享保十九年仲夏の比、神都を旅立ける

時しも、麦林舎におゐて名残おしまれける興行

なるを、今や巻頭に出して古を慕ふものなり。

されや其甲寅の年より、中国・九州・西国を経て、

千仞の岡に風をひねり、万里の流の蛭に吸れ、行

止を定ず豎横すること十四年なりしが、茂秋

法師先や萩原の露ときへしよりほどなく、

麦林翁は空の月に帰り、岸虎・東棠の二雅兄も〔四オ〕

日ノ少宮にまふのぼりて、其曾北叟やゆふべの山の

雲と去り、かの梅路子も、朝の水の沫泡のとど

まらぬ故人をかぞふれば、此一巻の連衆も幸にして

免る者、四たり五たり也。爰に無常迅速をもへば、一葉

の秋風ことに身にしむものから、頻に古園をおもふ

にたへず。延享丁卯仲秋にぞ錫を勢陽に返

せしが、はからず北堂の病床に仕へ、はらから春渚

と伴に残暑の蚊帳を扇ぎ、夜寒の窓をはりて

今更遠遊の罪を悔しが、其かひもあらしの露

とこそ。晩秋廿日の暁に正念合掌して、親母は紫〔四ウ〕

雲に乗じ、かの国に去り給ひぬ。年月おろそかなり

しこそなどおもひ返し、声をのみ紅涙にむせびつ、

梅真院の草戸を閉て、誦経念仏の外は風雅も希々

にかき籠り、苔の衣のかはきもやらで留らぬ

空のめぐりめぐれば又長月の有明に面影は立

さらでのみ、その忌日もきのふと過ぬ。わするゝには

あらで雲水のかれごゝろをや。猶神風のさそふ

に任せ、高倉山の紅葉の麻とちるより、五十鈴川

の流なる初鴨の鈴に勧められつゝ、戊辰の行秋

と伴に別の汗押のごひ、内外の宮の幣に畏り、あま〔五オ〕

た、び額突て北東に笠をむけぬ。さるから

親しき限り大川野べを越えて、明野が原に割

子ひらき、いさみの山に盃をとりて陽関の曲を

うたふ。こゝに赤氈に下冷を押へて沈酔す。あるは

興に笑ひ、あるは感に泣て、日すでに午にちかし。

かくてはあらじと袖をわかち、今はとてゆくゝ

隔つれど、顕になりし梢なれば、我笠や千鳥

とも見ゆらん、招く扇の蝶ほどに遠し。

一此頃に人々の賤の玉吟凡百七十章歌仙三卷〔五ウ〕

当座十七句の発句等あり。事繁きをいとひて、

みなくもらしつ。哥仙一卷

を左に出し、次に人々の絶章の発句一人一句  
づ、四季混雑に録せり。凡此集に此例を冠  
らしめて、所々の餞別当座等の句、多くは省  
くものなり。

草庵を住すて、出るに

萩の戸や雁に渡して笠の風

幾暁

物音起す里の有明

温故

年知れぬ瓶に新酒の涌て出で

浮石（六オ）

鈍<sup>ムラ</sup>ふてまめな男なりけり

秋至

筈<sup>ザルカゴ</sup>竹輿の肩より口が重さうな

為蝶

時雨加減を匂ふ茶の花

汪文

静さにまだ尻かへぬみそさゝる

陽里

友の来ぬ日に経の読あき

五風

瘦ながら餅にはもとのちから伊達

万竹

都といへど竹の中なり

芦頂

神ご、ろ塵も穢れぬ砌の雪

塘五

はなれた恋に鴛をうらやむ

洗利（六ウ）

だまされし夢には腹も立かぬる

待兎

銀屏はげて青あらし吹

陽二

ほと、ぎす古声うつる奈良の月

几虹

仏の門へ御師の劔先

丁路

誉て<sup>ウツ</sup>抹手にもこほれぬ花盛

何声

舟を繫で木の芽田楽

市邑

侍の裸にもなる陽気なり

羅々

錦通るとおもふ板の間

芦叟

洗ひ物ひらたい石に取ひろげ

曾夫（七オ）

海人の息やら鳥の声やら

呈史

唐へ見せに遣りたい詩が出来て

己蝶

むかしも今も吞る蒲鋒

扇和

おし黙る大壺<sup>ダイコ</sup>に紛れてはしやかせ

トハ  
和水

すへるがごとくおしき短夜

呉雪

あそこ爰<sup>スス</sup>伝授を偷むはしり書

五麦

法印の留主いつも芋ほり

座翠

西山の紅葉にさめた昼の月

入楚

瑠離に頬赤に御入部の晴

探古（七ウ）

神主の天窓にさはる傘さいて

ウチ  
春侶

船の古木も又渡す橋

龜北

摺鉢の音も飛のく築座敷

陶々

行灯の碁のはてず日の影

几気

東北に匂ひのなびく花の雲

友季

国は千五百におろす糶種

春渚

名録

物いはぬ人揃ふたり秋の暮

麦林（八オ）

此句やむかし麦林の晩秋にたれかれより

みつ、ある人の曰、実は虚の変じたる物ならん。

虚は実の化したるなりと。また側の人の曰、分  
れは千差万別也。もと虚実も花実も

文質も、暫く文に顔に是非を論ずる詞

にして、たゞ一心の種子の真ならんをやといふ

に、麦師曰、一種一心と云ふがはや二義に

わたれり。抑善悪と分たるは誰ぞ。云ふはいはぬ

に勝ると云へる諺こそおもしろけれ。

「(八ウ)

こ、を閑麗翁もいはでこ、にやと詠じ、芭道人

も唇寒しと嘆ぜられしぞと示されし

ほどに、使令万九が出花ぞと、茶碗さ、げる

をとりて一口二口飲々打仰向き、此高吟

ありければ、一座の人々唯々感じて俯向

ける姿は、げに揃ふたる秋の暮なりしと、今も

面影にうかぶのみ。

咲満ぬ菊もこ、ろや後の月

岸虎

剃髪吟

「(九オ)

一重づ、かろしうき世の更衣

茂秋

やがて我も無為境に入し時

髮剃にうき世の塵の落葉かな

安楽

鐘のあと啼の後や鹿の声

梅児

山間や月の涌出る梅の花

夜白

かくれ家や桃の朧につ、まる、

曾北

小比丘尼の小うたや惹コナキさいた妻

東棠

杜若あさ日の紅をさしそゆる

幸浦

捨舟のこ、ろ定る氷かな

梅関「(九ウ)

鷺草や中から一羽飛んでゆく

素道

影落て棹の鷺やかきつばた

改村古 畔古

朧夜を鼓にあそぶ狸かな

曇舟

右は古の一軸に添ひて、左は

今の一巻に附くもの也。

やどり木に音はり残る時雨かな

麦浪

落葉には問ぬをゆるせ初ざくら

義上

炭竈や山は錦を脱でから

南利

足あととは海鼠に残る千鳥哉

東里「(十オ)

四手掛は余所の春なり帰り花

如之

春もまだ馬に寝られぬ寒さかな

温故

障子にも笛をふく夜や鹿の声

松比

着せ綿は畑に吹して野ざくかな

茶城

水ぬるむ果は燃けり岩つ、じ

洞也

昼寝する闇はありけり夏木立

里雨

若竹の丈も延けり機の音

素間

鯛の名も花にかへるや夷子講

杜十

耳ふさぐ羅漢もあるや蟬の声

曾呂「(十ウ)

笈の戸も明放したる夏野かな

菊茂

籠にきく音はみな古しほと、ぎす

加條

吹止ば昨日に戻る柳かな

丸耳

水うたぬうちは遊す柳かな  
 乳呑で鮑はとれぬ千鳥哉  
 虫の声に織らせてあそべ女七夕  
 梅さくや田の近道は水の鶴  
 雨雲は杉に畳んでほとゝぎす  
 わけ入るも柳樽なり桜狩  
 昼飯の留主の畠や雉子の声  
 花知らぬ風の撫るや更衣  
 橋越へて世の音はなしかんこ鳥  
 折々は思案をほどく柳かな  
 山柅や指さす花の道しるべ  
 月日にも口の就ぬ蛙かな  
 山吹の影やさくらの水の裏  
 水仙の橋や藪のわたりあふ  
 舟はあれど歩行は今宵ぞ鷺の橋  
 晚鐘につき出されてや寒念仏  
 寒菊や波をわすれし藪の池  
 けふばかり仏を横に拝みけり  
 落の葉のうらを見せたり蝸牛  
 辛崎の下駄にまじりて水鶏哉  
 三井寺につかぬ鐘ありかんこ鳥  
 逃入て松の名を知る時雨かな  
 落葉して月もはぐれぬ山路哉

出歩  
 楚二  
 湖雁  
 原夫  
 蒼柴  
 乙鳥〔十一オ〕  
 芳礎  
 櫻二  
 哥請  
 昨非  
 東哥  
 為蝶  
 藤枝  
 東枝  
 彭里〔十一ウ〕  
 梅二  
 桂下  
 浮衣  
 秋至  
 草司  
 巴朴  
 雁路  
 千雨

捨らるゝ人うらやまし山ざくら  
 仙人の住家かくして春くれぬ  
 嚏のあとに物なし鳩の池  
 梅さくや今朝又ひろき瀧の幅  
 梅さくや翁が洗ふ牛の水  
 明安し濡色すぐによるの雨  
 水鳥の枝をうつして落ばかな  
 猿の子の乳をはなれたる清水かな  
 白雨や土器投しほとりより  
 白魚の煮てまだ白き寒さかな  
 我ひとり乗る船もがなかきつばた  
 山越て又都あるさくらかな  
 兀山も雲の闇ありほとゝぎす  
 頭巾着て魁桶へ這入る寒さかな  
 朧夜や鮎ヒトナの生長る水の音  
 夕顔や機から下りて馬を待  
 炭焼や京へ出て知る我穢れ  
 鶯や旭をしほる竹の中  
 桃さくや一里暮して間の宿  
 洗濯も御祓の裾やゆふだすき  
 炭売の里まで送る時雨かな  
 時ならぬ躍浴衣や煤はらひ  
 着て寝よとよるちる花や亭主ぶり

芦叟〔十二オ〕  
 几気  
 友季  
 津古  
 巴水  
 己蝶  
 何声  
 羅々  
 龜北  
 汪文〔十二ウ〕  
 翫故  
 寸日  
 百耕  
 市邑  
 里史  
 何芝  
 野麦  
 曾夫  
 入楚〔十三オ〕  
 洗利  
 柳夫  
 董軻  
 吟友

わけいれば枝道は猶花野哉  
 笋やきのふの草をのびあがり  
 秋来ぬとたゝむ扇や拍子ぬけ  
 梅はまだ半日寒し南うけ  
 風のない日にはちいさきやなぎかな  
 世の中よ牛と押合ふ年の市  
 陰あればその鯛をあるじかな  
 早乙女の捨子ではなし道のはた  
 橋かけて夏にも近し藤の花  
 五月雨や撓に隙干わたし守  
 湖や帯のはゞほど初時雨  
 海棠の草は睡らず暮にけり  
 小坊主は游で見たる蓮かな  
 人遠し落葉に瘦る瀧の音  
 行秋に瘦て別るゝ野馬かな  
 兼好が吉野にひとり若葉哉  
 卯の花や谷を落たる水の音  
 白鷺の身ぶるひに出る柳かな  
 風を見る松の預る落葉哉  
 あふぎ折る夜の音ふけて杜鵑  
 かくれ家もしばし根づきの氷柱かな  
 寒かへる紙衣に月もまだ清き  
 行春は落葉する木にかくれけり

杜春  
 兎船  
 加濃  
 椿洞  
 万壺〔十三ウ〕  
 松夫  
 僧  
 雲棟  
 巴州  
 志州  
 露暁  
 如柳  
 和水  
 可及  
 義舟  
 之景〔十四オ〕  
 花亮  
 至适  
 春侶  
 宇治  
 洞秋  
 朝可  
 仙龍  
 芦角  
 万竹  
 呉雪〔十四ウ〕

水の音にまぎるゝうちを蛙かな  
 よい星の下に耳ありほとゝぎす  
 梅覗く後へ戻るあるじかな  
 吹る葉を押へてまはる時雨かな  
 木枕へひゞく氷の落葉哉  
 若草や一つ二葉に岸の水  
 管船をたゝき起すや小夜時雨  
 たゞさへもちらん柳にはね釣瓶  
 雲の峯こへて海あり今朝の霧  
 暮はやき日をこぼしたる紅葉かな  
 月のない声の主やほとゝぎす  
 峯ばかりによつと夜明て郭公  
 舟ひきやにほひを潜る梅の花  
 はまるなと螢飛びけりわすれ水  
 戸を明て月も拾ふやよるの雪  
 川狩や主従七騎まる裸  
 木がらしや窓の見へたる峯の寺  
 鳥高し富士に雲なき春のくれ  
 内外の宮に首途のぬさ奉りて  
 霜のさく杉や朝日にすくむ袖  
 小町の賛  
 拾ふとて木の実の雨は笠のうら  
 父母の廟所にまふでゝ

風野  
 田丸  
 和来  
 山田  
 陽里  
 五青  
 序弘  
 探古  
 陽々  
 待我  
 塘五〔十五オ〕  
 待兎  
 五風  
 几虹  
 座翠  
 寄由  
 和鈴  
 陶々  
 卜陽  
 春渚〔十五ウ〕  
 幾暁  
 全

山風を箒に頼む落葉かな

全

一もどり戻つた暮よ又さくら

一得

△遠からず松坂に日くれて大口村なる最勝寺

にやどり、八九賢と風月を語る。主、麦推和尚「(十六才)

の曰、滑芸の旅ねはじめに大口村とは海内を酔

覚させて、桶口の章を注ぐべしと興ぜらる

もおかしう、爰に談笑の口切して茶に酒にあそぶ。

小春の情空<sup>コ、コ</sup>とともに長閑なりけり。此処をはじめ

次に木造・阿濃津・四日市・桑名・尾濃両国・越敦

賀・近江・花洛にいたりて二つの十月を過し、霜月

師走も尽て猶都に春三月を送り、初夏を

むかふほどに信州吟流子が墨直しの会。または

辛崎の朧夜の舟逍遥など一集となれり。且は

木曾寺の奉扇会の千句あり。庵主其撰ありし」(十六ウ)

とぞ。さては南勢の几気子が主にて、瀬田の螢見

など数々なりし花鳥の雅会、三千五百三十句余也。

右六州の紀行は門人望むにより、雪の鳥と号く

一集とせる故、こゝに洩る物なり。さてや祖翁の

牌前に二夜三夜念誦しておもひたつ麻衣

の木曾寺を出づ。雲裡坊をはじめ湖辺の

たれかれにおくられて一葦に浮ぶ。比は五月三日

なり。門人楚山は荒乳山まで見送らんと相従ふ。

ほと、ぎすの初音、たれも松が枝の岸はいづくぞと

とへば、はや入る月に闇を広げて、螢のみ鳩の」(十七才)

海づらを我ものに飛かふ。あとの湊沖の白洲

のあたり、水鶏ほとくと聞へて、漁火の影

のそこかしこに見ゆれど、猶朦朧たれば

何方ともわかず。指折ば五十にまる名所、たゞ一包

に暗し。

八景に寝よと着せたか五月闇

幾暁

さゝ波の枕に夢なく引まくるか、短夜の苦の

窓は沖津嶋山を後に明て、塩津山しほらし。

一声啼過るかたは、

声を見よと月出る崎のほと、ぎす

楚山」(十七ウ)

涼風の音ちかき竹生嶋を遥拝して、芦の

かりねも心当ある海津の里に船はて、石田氏

の宅にやどる。

閑雅堂にまねかれて

世の塵に此味ありて粽かな

幾暁

茸添て何の香もなし花かつみ

楽只

凡十五六章あり

こゝに菖蒲の日もきのふとなりて、わかれゆく。

山路をこへて塩津の浦に出て林氏にやどる。

芦笛亭の雨に

」(十八才)

花ひとり日のでる五月躑躅哉

幾暁

凡三十余章に及ぶ



見馴たる庭あたらしき月夜かな

鳥玉

浅黄地に柳を画くしぐれ哉

旦山

脱捨て汗なき陰や蟬の衣

芦笛

越前敦賀

此地は去年の霜ふり月あそび、ことしのさつ

きのけふいたる。みし梢の白雪も今は青葉の

しげりあひて、人々の風雅猶新たなりけり。凡六百

五十余章あり。それが中に去年の名残の会の一順を出せり。」(十八ウ)

寒風にさめぬにほひや梅花の花

右柳

聒ねぢむく雪の野馬

幾曉

町へ出る捧に瓢の唐めきて

其悠

わらひか、れば留所なき

一窓

絹漉ヌルに局の手水わかすなり

桂葉

影もねふけに見ゆる有明

白翅

牛市に薄も萩も踏あらし

琴路

つるさめてゆく酔も新し

二笠(十九オ)

分別は此度の聒が捺て来る

山高

舟で下つた厨子の極楽

左梅

凡此集一順一章にして

句数定らず。後これに倣へ、

もぢり羽に雁のみだれや初時雨

東吾

鳥はみな池にちりけり冬木立

其悠

気の長い藤の連あり遅ざくら

白翅

立てゆく小町があとに落ば哉

山高

木々染た果は鳥居に時雨けり

桂葉(十九ウ)

紫陽花や染直しても打曇

金峯

夕兒の影も穢すや馬たらゐ

一窓

地にあらば瓜を枕や二つ星

二笠

瓜の寝る夢を覗て茄子かな

琴河

五月雨や豊になじむ鞠の友

右柳

谷水もかさむ日和や初ざくら

左柳

弓張にひとりは嶋の昔かな

芦舟

隣にも起た音してほとゝぎす

琴路

錦溪舎の探題に

「(二十オ)

あと一羽まだ都なりかへる雁

幾曉

一夜に生ぜしといふ松原にて

是もまだ一夜の花や雪の松

全

常宮にまふで、

鐘青し誘ふあらしも一つ色

全

府中 互菊亭

鷺は世をぬれてもたてり田の青み

全

樹下石上を余所にのみ市中

を探し、歩行も本意なしと

此身を顧てかく申せし、此地

三十五章除之。

名月や暮た境は鐘ばかり

柯白

初雪の添ねや竹の宵まどひ

互菊

ゆく水のふところ床し杜若

六翅

代々の幟の煤や子持すぢ

暮水

福井 可推亭の雨後を

夏たけて桐の葉くらし雨あがり

幾暁

待宵の影やますほの花薄

可推「(二十一才)

金津 有隣亭

葉にも猶薫る風あり宿の梅

幾暁

耳にちなみの空に蟬の音

我六

右歌仙其外数章あり

朝茶のむこゝろ垢なし菊の花

花菱

六月にあらそふ雪や晒布

路丈

鍋あらふ水にも染ずかきつばた

我六

三国

芦笛子の宅にあそぶ日は水無月

「(二十一ウ)

の朔日なりけり。されば祝ふ日も

蓬餅笹粽は桃菖蒲の酒に

あらしそへども、けふや氷とともに出て

饅餅ひとり角々しう下戸に

茶をすゝめけるも清涼なりけり。

うへ込の蔵を室とや水餅

幾暁

夕陽観即事

日の鼓松に音してゆふ涼み

全

三十余章あり

「(二十二才)

蝶もまだ来ぬ曙の花見かな

芦笛

よる波の一夜どまりや薄氷

女歌川

瘦たがる女こゝろやころもがへ

巴浪

二夜へて有隣亭にかへりて、

林鐘四日ほそろ木の関をこゆ。

橘の茶店のあたりより汐ごし

の松へゆく道ありとや知らず

過しも悔し。

加賀大聖持

「(二十二ウ)

素玉亭に道の記のかさ高を笑はれて

ことの葉の重荷に暑き柳哉

幾暁

菊図亭の閑窓に一夜やどりて

夜語の四方八方青しひとつ蚊帳

全

宗英庵

橋音を掃て戻すや青あらし

全

巨石亭

陰涼し人涼せて葉のこゝろ

全

全昌禅寺はむかし祖翁の杖とめられし「(二十三才)

古跡にして庭はいて出ばやの柳ぞ

今にありときくものから、いざとて

まふでけるが、こゝろなくも梢などみな

打伐つて、其木とばかり淋うたてる

に、葉と覚へて一筋二筋のこれる

など、此道の糸筋を伝ひてと、祖翁の

常語もおもひ合せて、変化のさま哀

なりけり。

蟬うたふ枝に糸なし鈍のあと

幾暁「(二十三ウ)

此地七十余章漏之

藁茸を塵に残して雲雀かな

素圭

盃を覗く鏡やさくら川

東岡

箒目の後へ来る也けさの秋

路長

漕で来た川を跨や山ざくら

菊凶

藻の花の浮木とらへて咲に晝

洞鬼

色かへぬ松に色あり春の雨

芦舟

実ざくらや今はまたる、風の道

右木

棒ぬひて駕籠はもどるや露しぐれ

巨石「(二十四オ)

山中

武矩主は貞室叟に教へ、桃妖主は

祖翁に習ふ。

松高き風にさらすや蟬の衣

幾暁

画賛

人も鷺も捨て涼しき小舟かな

全

此地五十余章脱之

雪とふらば一谷うづめ山ざくら

桃妖

橈立た家も留主也秋の暮

波文「(二十四ウ)

虫の音は草へ流れて明の星

指月

那谷寺にまふで、大悲閣に

のほればけふ石山の石より白き

奇巖の曲折言に尽ず。

峯作る雲の根こゝに石の山

幾暁

安宅の古跡もちかき須天の里なる

湖水亭に雅閑ありて、風客を

とゞめ、一句の通手形をとるに、夏

瘦の弁慶とがむるにも足らじ。

「(二十五オ)

されば纒なる頭陀袋に勞れて、

松島象潟の行の遅々たることを、

むつの国へ我もいそげどねり雲雀

幾暁

小松 虹橋下

打水に一息種を百合の露

此地三十余章缺之

かんこ鳥あしの下ゆく水の音

舎来

早乙女の片肌すゞし比叡の陰

南甫

おもしろう髭は吹れて紙衣かな

二峰「(二十五ウ)

苔水に汲んだあとあり山ざくら

巴潦

舟の夢江口で覚す礎かな

是笛

本吉 三葉庵

水音も聞ながしてや合歡の花

幾暁

此地三十余章不記之

若いから兀た山ありほとゝぎす

松任 人々に旅情をかたる、

干瓜に并ぶ皺あり旅ごろも

此地六十余章不録之

袷ほど影はふとりて後の月

通天も墨画になつてしぐれ哉

花のさく山どれくぞ冬木立

梅へゆく道はまぎれず朧月

寒声のうらを返すか夕すゞみ

松の葉もよみ尽すほど涼けり

千代婦に對して

風も月もほそき扇に任せけり

金城 みな月十八日に入る。

暮柳舎即興

人よる清水がもとの硯かな

此日幾暁法師をむかへて

待得たり団扇の顔にあたるまで

問る、峯を雲に指さす

鷺のたつ野づらの石に水おれて

毛のふけありて馬市の跡

明家の白を借てはいれて置

裳も糸もされた三弦

大睡

幾暁

「(二十六オ)

寄井

里夕

之甫

友枝

和青

女 千代

幾暁

「(二十六ウ)

全

暮柳

幾暁

芦丸

可枝

五菱

談夕「(二十七オ)

川舟の茶も白ふなる朝の月

ひくい薄の手は隙で居る

ウ秋風も咄も見ゆる壁下地

齊藤六をなぶる似黍

黒木売美しいのを買ふて遣り

杼コケラの雪のすへる捨石

水鳥の中からひよいと竹生嶋

きせる通すも竹輿の慰み

元服を仕て大々に飛入らせ

額まではづす椽先の月

遠山を柳の中にちり出して

船に碇の音を着たがる

下戸くといはずにこれを吸ふて見よ

髻ナギキタ大事がる長剣の弟子

藁門に千石の時うへたはな

日はてらくと蜂の巣が涌

二節法も百轉の一片にて

さいた畳に膝たのむなり

いつ来ても吹革の茶釜ちんくと

紙でないかとおもふ早梅

十月も神馬はつなぎ残されて

すほめた傘の風に噓

錢箱も近い風呂屋は垢がない

如本

咀雲

蘭阜

壺市

芝田

芷珍

倚之

後川

言路「(二十七ウ)

鯉遊

左里

芦洲

暁

柳

枝

丸

夕

菱「(二十八オ)

雲

本

市

阜

珍

仕舞を京で肥る順礼

土偶テクの坊を乳のかはりにねぶらせて

金紗の水の合ぬ裁物

葺である蓬もほこる月の影

横に担タげばはゞかりの関

盗人に囃ハふた髭を撫おろし

日のさす夜着に搗米スミの糠

ニウ呵たか放れた鳥に楽もあり

眼鏡かたゝあそぶ勘助

夏山の裾きりあけて吹せたり

馬糞さらへの走る鈴音

月代を門で剃合ふ永平寺

落花に尻のあとがまん丸

屋根とつて燕に舟をみせにけり

来よくは又もゝ行はる

暮桜下をとふ

河風に笠とらればや夕涼

幾暁師の旅館にて

たづぬるや土用も過て瓜の蔓

千里の笠を陰静舎の砌なる

白雲木の枝にかけて

居睡の柱見かくや青あらし

幾暁法師の長途休て

田

川

之

遊遊〔二十八ウ〕

路

洲

里

柳

曙

丸

枝

菱

夕夕〔二十九オ〕

本

筆

幾暁

知角

角

幾暁〔二十九ウ〕

幾暁

虫干やかけ残したは旅ごろも

延樹亭

奥山の涼しさもつや楨の陰

非狄亭のいけ花を

沢潟や鷺は汀に睡れども

珈涼後室をとふ

明て見ぬ鏡の蓋や松の塵

三四坊蘭阜子を伴て鶴来に

遊行す。白山の神社にまふづ。

桐の葉や座具に打しく神の庭

神の田や御注連を直に鳴子引

鉦の緒や我より先へ今朝の秋

此地六十余章こゝに省く

帆の中にあつい物あり雲のみね

海棠や最ふ短夜を隣まで

簾には風を畳むや土用干

稲妻の崩れて広き花野哉

里朝子に誘れて宮の腰に濱出す。

芦夕舎にやどり、人々と応鹿亭に

遊ぶ。香稻田つらにほのめきわたり、西上人

の世の中よかれの歌もおもひつゞけて、

鉢の子の花咲にけり稲の秋

渭水亭にあそぶ。折から村雨のさと

芦丸

幾暁

全

全

〔三十オ〕

幾暁

蘭阜

三四

竹路

嶋筋

几東

呂尹〔三十ウ〕

西上人

幾暁

幾暁

過る庭のけしきを、

走つく穂の音ある雨の篠

全

此地五十章あり。

「(三十一才)

秋もまだ一重で遊ぶ蜻蛉かな

芦夕

紅梅やむかふの見えぬ橋の反

貝故

萍や野飼の牛の付まはし

季風

三ヶ月は魚にのまれて柳哉

渭水

二日三日杖をとゞめき。

鳥道下に三閑居あり。各風騒の客

を遊ばしめて雪月花に老を養ふ

用意とぞ。

木に草に懐広し鳥の秋

幾暁「(三十一ウ)

七夕 暮柳舎一集あり。

浮橋の後の雫や二つ星

全

可枝亭

月影にかつらかけたりきりかくす

全

和斉亭

野に山に礎のとゞく錦かな

全

巨井亭

わたらせて鳥を色とや松の秋

全

西上人の秋夕の画をかけて、

「(三十二才)

芷珍亭に名ごりの会あり。

我はまだ朝立笠や鳴の声

幾暁

松裏庵の勝餞に、

つながれて牛は寝あかぬ花野かな

全

麦浪子が前格とて養福寺にて

餞の会あり。

行暮る野山はあらし穂屋の頃

如本

笠敷度に月はわかれぬ

幾暁

不用亭の床上にむかへば、つれなくも「(三十二ウ)

の絶景をかけられたり。あるじのいへる

は、むかし祖翁の漂泊ありける其秋の

日に、爰の浅野川なる大橋のほとりなど

逍遙し給ひて、例の再思の潤色の

うへ、此紙にはじめてしるされける真跡

なりとぞ。同じ雲水の境界に今更

感じて、筆をふるふもおこがましけれど、

橋長し鳥の羽わけて秋の風

幾暁

笠か月かと遊ぶさかづき

五菱「(三十三才)

鳥道下の人々に別おしまれて

すはらんとして鳥のゆく薄かな

幾暁

かたむきすます有明の笠

舎朶

河下す撓の軒に秋くれて

楚雀

たれぞ問へかし樽はたしかな

禾梁

から紙の画にさへ好の碁をながめ

宜考

風はしらずにゆがむ若竹

里橋

鶏の砂かきわくる日最中	巨井	投合ふて七草になるや川むかひ	兼風
洗ふたらゐも広い湖	布扇 <small>〔三十三ウ〕</small>	干物に薺姫のわかれかな	後川
御通のあとは埃の雲がたつ	芝芳	鳥寒し嶋の見へ透く森の瘦	言露
物見に見たい顔がかくれた	其追	掘捨た井筒も清き氷かな	蘭阜
もれて来る伽羅 <small>カ</small> の名は鼻に覚えあり	菊人		
あきれて居 <small>ワッ</small> て京のわる口	和斉	水仙にをりてすみけり竹の月	鳥道 <small>〔三十五オ〕</small>
飯次を明て仕舞ふか悟やら	安之	門前の出来て淋しき礎かな	宜考
きよんと立たはけふのぼる峯	里酖	はなれ家も逃道のなき暑哉	女 珈涼
初花は月ほど匂ふ梢から	封卜	九重を綿につゝむや雲の峯	封卜
鳥も囀る民の賑ひ	雨虹	片々に瀬はさがしき柳かな	左菊
名録	〔三十四オ〕	柴買ふて紅葉の賀なり冬籠	楚雀
物ひとつぬぐ時浅黄さくら哉	暮柳	ほとゝぎす雲踏はず星もあり	芷珍
盃は影で出したり玉まつり	如本	梅咲て寒さもかろし竿釣瓶	禾梁
大仏の鐘も撞ばや鶏頭花	五菱	三日から月も穂に出て薄かな	貴追
鹿ものおとして歩行花見かな	可枝	片肌は火燧も脱て小春かな	和斉 <small>〔三十五ウ〕</small>
蚊帳からさゝれに出たる暑かな	左里	浦嶋も明て目出度ひゝなかな	芝芳
見に来れば見に出た留主やけふの月	芝田	鹿の音は錦で来るや竹の奥	菊人
峠まで手をひく雲や郭公	岨雲	鰭も尾も木魚にありて納豆かな	巨井
笠ぬいた人に淋しき霰かな	鯉遊	鶯も育た竹のふくべかな	里橋
隣より遠の親類 <small>コ</small> ややまざくら	壺市 <small>〔三十四ウ〕</small>	苗代やまだ吹そよぐ水の畝	里酖
女房の看経寒し網代守	芦洲	切々に暑さのわかる木陰哉	雨虹
我村に近づきもたぬ案山子哉	談夕	磯山にのこる帆もあり遅さくら	布扇
八重菊や昔の京は露しぐれ	倚之	しげりから覗く人あり遅桜	可操

岩に出る釣の白髪や雪のあと 知則〔三十六オ〕

木の下の闇に月夜や滝の水 湖草

木がらしや吹てはもとの嵐山 百里

行秋や蹴ぬけの塔をちる木の葉 麦水

彫物にかよふ大工や蓮の花 里晩

羽織着て男めくなり山桜 可松

禪堂もぬけがら日や蟬の声 乎哉

祇王寺に恋をのこすや鹿のこえ 和菊

朝から旅立もあり山ざくら 非狄

木の間から洩る空青し蟬の声 規工〔三十六ウ〕

舟曳のちぎれて出たる霞かな 暮桜

此外に自他の発句付句等千九十余章あり。

こゝに省く。猶や翌庚午の年正月二度金城

に遊で、晩春を尽せり。其雅会又千三十章

略之。

葉月五日金城を去て、津幡駅

雪燈下に夜話す。

竹過る雨の数とや虫の声 幾暁

月まちて肌にあかるき夜寒かな 見風〔三十七オ〕

此地往来八十余章あり。

鐘つゐて猶おもしろき柳かな 見風

明き寺に追々伽や百日紅 観之

秋涼し木槿は落て白の音 亀跳

さびしみのふとり勝たる瓢かな 夏新

袖笠の旅人まじるや時鳥 里丸

能登一宮

松下亭の簾を巻ば、半輪の角すでに丸み、

名もちかき明輝の木の間にもるゝに鈴虫の〔三十七ウ〕

音も処得て神々しけれ。むかし源順此宮

に御使としまふで、しげくともわきて祈らん

とよみし古事などのこれり。

深山木や月をおしげにもらす影 幾暁

此地三十余章あり。竹の津など見めぐりて、一夜

二夜かたる。

家持の其夜の雪や棉ばたけ 百凡

これは古歌によれり。

しら露をたばね揚たる薄かな 普如〔三十八オ〕

一遍に白ふなる野や寒念仏 峻流

木がらしに折のこりけり鹿の角 指月

すがたみの池に花さく涼かな 不取

一とせは一瀬の幅か天川 林鶯

伐竹に夕日のすへる涼かな 淡交

富木 晩魚亭

寝ごゝろも穂綿かつぎて芦の雁 幾暁

八幡宮にまふづ。矢根石を題して

月の弓ひかぬ代は捨て矢の根石 全〔三十八ウ〕



三五夜

かたづけば庵の物なりけふの月

全

此地百六十余章あり

柴舟は昨日の山やはつしぐれ

晚魚

唇は筆に曇らす月見哉

勇几

螢火や梅晴らして草のうへ

桒馬

一日のからくり機や汐干渴

烏百

初あらし相手にふくやすまふ草

素涼

山寺は人の案山子や後の月

花庭「(三十九才)

山引た祭のあとや雲のみね

祖卜

山吹や古い池ともおもはれず

文芦

蠟八や千鳥の瘦も水鏡

馬耕

星合や薫の雲とゞくうち

左紫

涼しさや青葉などで来る森の鐘

左隣

筍や今朝は卒塔婆を延て居る

楓鋸

釣鐘はふり残しけり今朝の雪

哥菊

星合の首尾を囁く薄かな

松露

卯の花にたそがれはなし丸木橋

里暁「(三十九才)

浦上

兼好僧都は阿部野に庵して菘機の梭を

投て、閑を養れしに、年月を経てうかれ歩行

矢立の筆を切らし、いかにぞやさしがしき境界

よ、など語りて。柳巴亭の灯下に旅情を述ぶ。

杖に道の豎横をるや稲むしろ

幾暁

此地三十余章あり。

すゞしさや人を下してもどる船

柳巴

輪島 松にかゝれる薺を

「(四十才)

薺や千とせ一朝松のうへ

幾暁

此地百八十余章あり

空に曲る道あり風の天津雁

庭松

薦に這ふ道も暮てや高灯籠

只仲

帆の見ゆる須磨に奥あり鹿の声

右考

虚無僧に顔の出来たる桜かな

藤士

卯の花に今朝は嘘つく撞木哉

荷玉

鐘つきの後へまはる柳かな

喜良

曾々木 塩屋見へて景おかし

「(四十才)

雁をろす羽風におれて塩けぶり

幾暁

き暁ほうしを御宿申て

月かげや笥をつたふ道もあり

女 斗糸

風呂敷に晩鐘つゝむさくらかな

寂武

飯田

臥為亭は間数ありて此柱に山を望み、その壁

に海をむかふ。こゝに人々と酒くみかはし

月遅き宵を木の間の漁火かな

幾暁

正院 芽菊庵にあそびて

「(四十一才)

塩けぶりあとから立や鴨の声

幾暁

範有両子と鈴の御崎にまふで、別当の

山館にやどる。雨ふりすさび、寂寞たり。

染たらぬ梢呵るや北の雨

全

つとめて金分高座の神社にまいり、下山

して粟津琴江院にあそぶ。勝景也。山上に

亭あり。和尚の需により拾葉二字を

梢から菓子のごぼる、庵かな

全

つれくゝなるまゝに日ぐらし硯に

むかひて、こゝろに

うつりゆく月や机の鏡板

全

右兼好の画賛也。

重陽

ぬれたがる上戸の膝や菊の露

全

秋興

色鳥に笠着たもあれ梅もどき

坡東

格子の竹に繋ぐ朝日

幾暁

銭もたす富貴を市に秋さびて

範夫「(四十二才)

さしみにせよと水流すなり

鼓言

今晴た竹押わけて日の光

臥為

さびしい方へ駕籠の近道

一兮

金いれて金掘る事に遣はるゝ

茂杉

呵る片手に数珠は何やら

其友

おもふさま寝過せよ迎ゆきがふる

止柳

雲水の客をとめて

世の角はなし茶に語る月の庵

枕の朧に並ぶゆふがお

幾暁「(四十二ウ)

松柏にしきのたらぬ山ほめて

味長

鐘の中から何鳥の声

遊巴

連やめてみれば旅の我に倦

巨竹

茶碗をふいてかぶる手拭

寄江

笋を売らねば藪が真黒な

杜静

鞆の間を撞木ふらつく

李洞

高足が驚したるゆふ鳥

野馬

覗ぬ人がほれて居る也

非木

姫ゆりはおもひを開く花そうな

佳石「(四十三才)

画図躰

水潜る岩に穴あり菊の花

幾秋

鳥の錦は色々の声

幾暁

鞍壺に都の月の残りゐて

可稻

わすれた事が醒て戻た

千畝

此地二十日あまりの留錫に、凡雅会四百

九十余章に及ぶ。

酒壺や菊の水そこ、にあり

之候

新宅に襟垢付るあやめかな

坡東「(四十三ウ)

稲妻や宵の扇にたゝみ込む

鼓言

盃を梢に置いて月見かな

臥為

鳴鹿の背中冷たりかゞみ山

茂杉

行秋や肩すほめたる馬のうへ

止柳

白壁の光をぬかす薄かな

一兮

松風の中に新らし鹿の声

範夫

月ありと知らで雨きく落ば哉

其友

鳥に借す庵も出来たる薄かな

正院

鶴聞

呑もの、果報見せてや寒椿

寄江「(四十四才)

うの花や迷ひ子の札読でやる

味長

小僧にはあはれぬ山やかんことり

巨竹

浮鳥の山水寒し僧ひとり

遊巴

河骨や足投入る水の椽

杜静

下闇の花となりてや飛ぶ螢

野馬

湖に箒目もあり秋の風

李洞

黄壁へ牛曳もどせ桃の花

非木

ちり仕舞ふ柳ほめたり後の月

佳石

一谷は稲茎しろし後の月

飯田 幾秋「(四十四ウ)

囀の中からぬける雲雀かな

可稲

村ありと茶の花匂ふ深山かな

千畝

一兮子をいざなひて、出立つ人々はるかに送らる。

松波の連卜子をとふ。とゞめらるれど、行

先冬を隣るに、心あはたゞしういなみて

幾暁

蜻蛉やしははむすぶ旅ごゝろ

連卜

真脇 俚芳亭  
梢から立山白し後の月

幾暁「(四十五才)

此地に小木の人々も来りて凡七十

余章に及ぶ。こゝに捐しつ。

麻の葉や柳の先へ御祓川

冠里

萍や水の蓋とる朝あらし

浮石

虫聞て夜のこゝろやけふの月

俚芳

影坊の居るまゝ、我も桜かな

小木

其幸

蓮の実やこゝを去ること遠からず

詩月「(四十五ウ)

(平成26年10月31日受付、平成26年11月14日受理)